

43

研医会図書館所蔵森約之書入れ本 『脈学輯要』について

安部 郁子

公益財団法人 研医会図書館

『脈学輯要』は江戸の考証学者多紀元簡(1755-1810)が著した脈についての研究書であるが、研医会図書館には幕末から明治にかけて活躍した森立之(1807-1885)の長子である約之(のりゆき)(1835-1871)が書入れをした同書がある。『脈学輯要』とはどのような本であるか、また、森約之の書入れはどのようなものかを合わせて調べることにした。

【方法】 研医会図書館所蔵の『脈学輯要』に挙げられた中国医家の名前及びその著作を調べた。その上で、出現回数が多い順に医家を並べ、時代別に医家を一覧してみた。また、彼らの著作が研医会図書館にどれほど所蔵されているのかを調べた。

また、森約之の書入れについては、その形式ごとにどれほどの数があるのかを調べた。

【結果】 まず、『脈学輯要』に挙げられた中国医家であるが、全部で56名であった。最も出現回数の多かったのは16回で張介賓(張景岳)(1563-1642)、15回はふたりいて、張路玉(1617-?)と王淑和(180?-270?)、14回は何夢瑤(1693-1764)、13回は滑伯仁(1304?-1386)、9回出現したのは呉山甫(呉崑)(1551-1620)と李士材(李中梓)、8回が董西園と王士亨(12世紀)、6回が李東璧(李時珍)(1518-1593)、5回が孫思邈(581-682)、4回が徐春甫(1520-1596)と汪石山(1463-1539)と戴同父と陳遠公(陳士鐸)(1621?-1700)の4人であった。3回以下の出現医家は41名である。その中には高陽生、王冰、樓英、薛己、朱丹溪、王肯堂ら有名な医家も入っているが、筆者のような不勉強な者は初めて見るような医家の名前も多くあった。改めて江戸の考証学者がいかに多くの文献に当たってその学問を深めていたのかを思い知った。医家が輩出した時代を見ても、三国時代から清代まで各時代あり、著者多紀元簡の視野の広さがわかる。

一方、研医会図書館がこれらの医家の著作をどれほど所蔵しているかについては、残念ながら、56名のうち20名の著作が見つかっただけであった。研医会図書館に最も多くあったのは薛己の書で、13のタイトルであった。次は王冰11タイトル、王淑和と王肯堂がともに9タイトル、以下、順に孫思邈、張路玉、張介賓、滑伯仁、汪石山、呉崑、李士材、王士亨、朱丹溪、李時珍、陳遠公、朱肱、陳飛霞、沈際飛、呉綬、張登誕先であった(但し、民国時代の医学叢書の中に別の医家の著作が収載されている可能性はある)。

森約之の書入れについては、欄外の頭注が54か所、朱筆による傍点箇所は452、削除すべき意なのか、行の中央に線をひいたものが42か所、本文部分に直接書入れのある箇所が18であった。特に傍点は上中下巻のどこにもあり、全ての頁に真剣に向き合った読書の姿勢を感じた。親である森立之に先立って、早逝してしまったことが残念に思われた。

【考察】 この結果をみて、今後は図書館で蔵書を買入れる機会があれば、『脈学輯要』に挙げられている中国医家の著作を購入することも検討すべきだと感じた。森約之の書入れ内容についてはまだ今後きちんと整理すべきと思われるので、書入れの翻字作業などを進めていこうと考えた。『脈学輯要』は脈診についての重要な書籍と思われるが、江戸の考証学を理解するためには、多紀元簡が参考にしたこれらの中国医家の著作についても、もっとみるべきなのだろうと思われた。